

「特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する研究」

目的及び方法

①小・中学校の特別支援学級(自閉症・情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級)における自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の現状と課題を把握する

自閉症児・者の学習面や生活面の困難さと指導・支援に関する先行研究のレビュー

自閉症・情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級の担当者を対象にしたアンケート調査実施

②特別支援学級での自立活動の時間における指導に焦点を当て、研究協力機関での実践を通して、自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の授業を組み立てるうえでの要点を示す

研究協力機関等での情報収集と自立活動の指導上の課題の整理、要点の検討

③特別支援学級に自立活動の時間を位置づけて指導することの意義について考察する

研究協力機関における要点に基づいた自立活動の指導の実践

結果

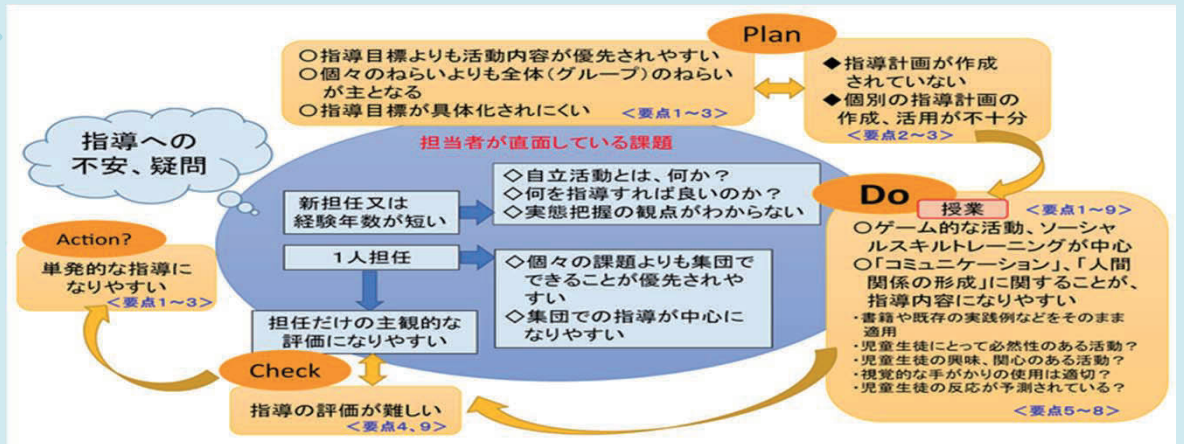


図1 特別支援学級の担当者が直面している課題と自立活動の指導上の課題

表1 自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点

個々の児童生徒につけたい力(目標)の絞り込み

- 要点1: 課題となる児童生徒の行動の背景、理由、興味・関心、得意を捉える
- 要点2: 長期目標と短期目標の設定—児童生徒につけたい力(目標)を具体化する—
- 要点3: 長期目標と短期目標を踏まえた単元の設定と指導の検討
- 要点4: 自立活動の学習指導案(略案)の作成

自閉症のある児童生徒の障害特性や認知特性に留意した指導

- 要点5: 動機付けを高める学習活動や教材を取り入れる
- 要点6: 児童生徒の主体的な発言や行動を大切にする
- 要点7: 視覚的な手がかりの機能を考えて活用する
- 要点8: 情報を整理して伝える

指導の振り返り

要点9: 指導の振り返りの重要性

総合考察

◆時間に位置づけて自立活動を指導することの意義

◇P-D-C-Aサイクルを意識 ◇指導目標を明確に捉えられる ◇指導の段階性を意識し、見通しがもてる

◆自閉症のある児童生徒の自立活動の授業づくりで教師が留意すべきこと

- ◇授業づくりは、児童生徒の実態から出発すること
- ◇明確な目標に基づいて指導すること
- ◇個々の自閉症のある児童生徒の実態に即した工夫を行うこと

専門性の担保・向上

日々の授業記録の蓄積と活用  
校内授業研究会の積極的な活用

(研究代表者: 柳澤 亜希子)

# 特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する研究

(平成26年度～27年度)

**【研究代表者】** 柳澤 亜希子

## **【要旨】**

本研究では、まず、小・中学校の特別支援学級（自閉症・情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級）における自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の現状と課題を把握するために、アンケート調査を実施した。その結果、①特別支援学級の担当者への自立活動についての理解の促進の必要性、②自立活動の指導計画と指導目標の設定の重要性、③自閉症のある児童生徒が自己を肯定的に捉えることができる指導の重要性、④教師による指導の振り返りの必要性と児童生徒による自己評価の重要性等が明らかとなった。

また、アンケート調査や研究協力機関等からの情報収集及び実践に基づいて、特別支援学級の担当者の自立活動の指導上の課題を整理した。そのうえで、特別支援学級の経験年数が短い、あるいは初任の担当者が、自立活動の授業を組み立てる際にまずは留意して欲しいことを3つの側面（①「個々の児童生徒に付けたい力（目標）の絞り込み」、②「自閉症のある児童生徒の障害特性や認知特性に留意した指導」、③「指導の振り返りの重要性」）から9つの要点にまとめた。また、研究協力機関の実践例に基づき、各要点を具体的に解説した。

本研究を総じて、特別支援学級に自立活動を時間に位置づけて指導することの意義と自閉症のある児童生徒の自立活動の授業づくりで教師が留意すべきことについて考察し、特別支援学級の担当者の専門性の担保・向上に向けた今後の取組について提案した。

## **【キーワード】**

特別支援学級、自閉症、自立活動の指導

## 【背景・目的】

中央教育審議会初等中等教育分科会（2012）は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）」で、特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習の一層の推進の必要性を明示している。コミュニケーションや社会性に困難さがあり、独特な認知特性を有する自閉症のある児童生徒においては、通常の学級の教育活動に参加することは容易なことではなく、様々な困難や混乱を伴う。国立特別支援教育総合研究所（2014）は、当該学年の算数科・数学科の学習が可能な児童生徒であっても、自閉症の障害特性から派生する心理面や行動面等の問題により、交流先ではなく特別支援学級での学習が主になっていることを報告している。自閉症のある児童生徒が、通常の学級の児童生徒と共に学び合う機会を保障していくために、また、教科等の学習を支えていくために自立活動の指導は不可欠であり、特別支援学級の担当者の自立活動の重要性に対する意識と専門性の向上が求められる。

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域である（文部科学省，2009）。小・中学校の特別支援学級では、特に必要がある場合には特別の教育課程によることができ、自立活動の内容を取り入れる等して特別の教育課程を編成することが可能となっている。自立活動の指導では、自閉症に対する理解や専門的な知識、技能が必要となるが、担当者の特別支援学級での指導経験年数の短さによる専門性の課題が指摘されている。特別支援学級の担当者は、「自立活動をどのように組み立てたら良いかわからない」（国立特別支援教育総合研究所，2014）ことを課題に挙げている。特別支援学級に自立活動の指導を定着させるためには、担当者が授業を組み立てる際の手順や要点を理解することが必要である。

本研究では、特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒に対する指導の充実を目指して、小・中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級における自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の現状と課題を把握することを第1の目的とした。また、特別支援学級での自立活動の時間における指導に焦点を当て、研究協力機関での実践を通して、自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点を示すことを第2の目的とした。これらを踏まえて、特別支援学級で自閉症のある児童生徒に対して、自立活動の時間における指導を行うことの意義を考察した。

## 【方法】

自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の現状と課題の把握では、小・中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級、知的障害特別支援学級の担当者を対象にアンケート調査を実施した。自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点については、先行研究やアンケート調査の結果、研究協力機関をはじめとする特別支援学級の担当者からの情報収集、研究協力機関での実践に基づいて検討した。

## 【結果と考察】

### 1. 特別支援学級における自閉症のある児童生徒の自立活動の指導の現状と課題

「自閉症のある児童生徒が在籍していない」、「学級が設置されていない」との回答を除いた有効回答は、自閉症・情緒障害特別支援学級では、小学校は 636 学級中 307 学級、中学校は 313 学級中 117 学級であった。同様に、知的障害特別支援学級では、小学校は 633 学級中 179 学級、中学校は 314 学級中 56 学級であった。

自立活動を「週の時間割に位置づけている」担任と「時間を設けず、各教科・領域に取り入れて指導している」担任との比較から、自立活動の現状と課題を検討した。その結果、回答者の特別支援学級の経験年数は「5年未満」が占めていたこと、少数ではあったが自立活動の捉え方が不十分である担任がいたことから、自立活動についての理解促進の必要性が示された。また、自立活動の指導を「週の時間割に位置づけている」担任の場合は、「時間を設けず、各教科・領域に取り入れて指導している」担任よりも自立活動の指導計画を作成しており、計画に基づいて指導がなされている可能性が示唆された。自閉症のある児童生徒の自立活動の指導で取り上げられている指導内容は、人間関係の形成やコミュニケーション上の困難さに関わる内容が中心であり、自閉症のある児童生徒の興味・関心や得意なことを取り上げる指導内容が少なかったことから、困難さの改善・克服を目指した指導と共に自己を肯定的に捉えることができる指導の重要性が示された。さらに、指導の評価では、個々のねらいに基づいた評価に加えて、教師自身の指導の振り返りの必要性と児童生徒による自己評価の重要性が指摘された。

### 2. 自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点

特別支援学級の担当者の経験年数の短さや専門性の課題、指導体制上の理由等から、指導目標よりも活動が優先あるいは重視される傾向にあること、複数の児童生徒が在籍する場合、集団での指導が中心になり、児童生徒の個々の課題やねらいよりも集団全体でのねらいが主となり、それによって指導目標が具体化されず評価が難しくなるといった一連の関係が示唆された。図1に、特別支援学級の担当者の指導上の課題を示した(図1の< >内の番号は、表1に示した各要点の番号と対応している)。

特別支援学級の担当者が抱える課題を踏まえて、自立活動の授業を組み立てるうえで、経験年数が短い、あるいは初任の担当者に、まずは留意して欲しいことを①「個々の児童生徒に付けたい力(目標)の絞り込み」、②「自閉症のある児童生徒の障害特性や認知特性に留意した指導」、③「指導の振り返りの重要性」の3つの側面から9つの要点にまとめた。表1に、各要点の内容を示した。

各要点の具体については、研究協力機関(小・中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級)での実践例に基づいて解説した(研究成果報告書を参照)。

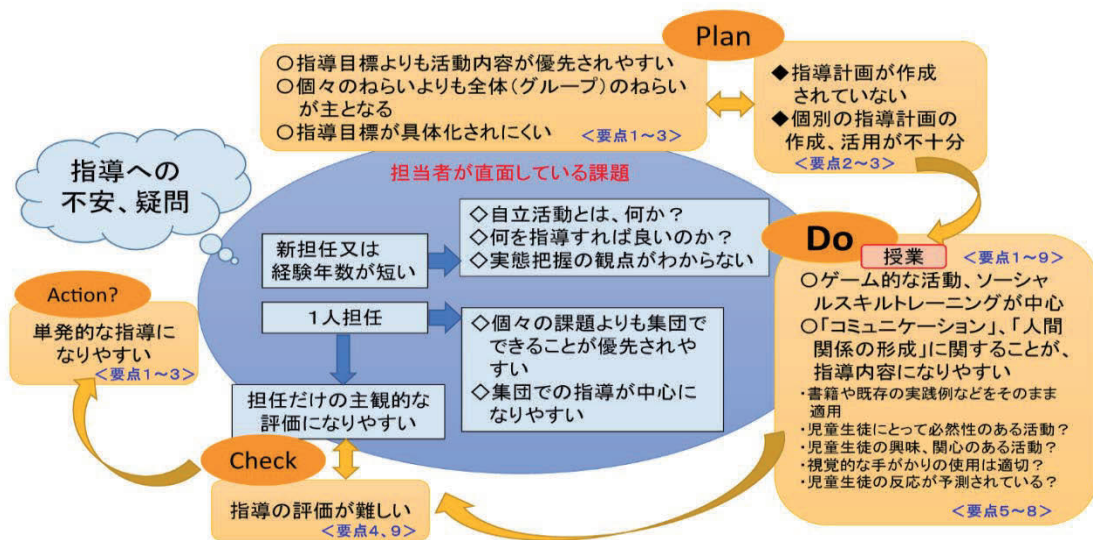


図1 特別支援学級の担当者が直面している課題と自立活動の指導上の課題

表1 自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点の内容

個々の児童生徒につけたい力(目標)の絞り込み	
<要点1> 課題となる児童生徒の行動の背景や理由、興味・関心、得意を捉える	①課題となる児童生徒の行動の背景や理由を捉える ②児童生徒の興味・関心、得意を捉える ③個別の指導計画への児童生徒に関する肯定的な内容の記入
<要点2> 長期目標と短期目標の設定—児童生徒につけたい力(目標)を具体化する—	①目標の設定期間を定める ②長期目標及び短期目標の設定に当たっての留意点 ③個別の指導計画の様式例
<要点3> 長期目標と短期目標を踏まえた単元の設定と指導の検討	①長期目標と短期目標に基づいた指導目標の設定 ②計画的に指導を進めるための指導計画の作成の必要性 ③長期目標、短期目標、各単元の目標の関連性を意識する ④集団での指導における全体目標の設定の工夫 ⑤児童生徒の実態の変化などに応じた指導計画の見直しの必要性 ⑥指導内容、指導方法などの検討 ⑦各単元のつながりを意識する
<要点4> 自立活動の学習指導案(略案)の作成	①本時の目標に「全体目標」と「個々の児童生徒の目標(個人目標)」を明記する ②「評価の観点・方法」を明記する ③自閉症のある児童生徒の障害特性や認知特性を踏まえた支援や配慮に関わる項目
自閉症のある児童生徒の障害特性や認知特性に留意した指導	
<要点5> 動機付けを高める学習活動や教材を取り入れる <要点6> 児童生徒の主體的な発言や行動を大切に <要点7> 視覚的な手がかりの機能を考えて活用する <要点8> 情報を整理して伝える	
指導の振り返り	
<要点9> 指導の振り返りの重要性	

【総合考察】

1. 特別支援学級に自立活動の時間を位置づけて指導することの意義

(1) 「P-D-C-A サイクル」を意識することができる

特別支援学級の自立活動の指導では、P-D-C-A サイクルの「D (do)」に重きが置かれており、「P (plan)」や「C (check)」に対して意識が向きにくい、あるいは難しいことが示された。時間に位置づけて自立活動の指導を行うことで、達成すべき目標に向けて見通しをもって指導することになるため、より一層、計画的な指導につながると考えら

れる。自立活動の指導をどのように組み立てたら良いかわからない経験年数の短い、あるいは初任の特別支援学級の担当者では、自立活動の指導と各教科や他領域と関連付けながら指導を組み立てたり、指導の成果を評価したりすることは、難易度が高いと推測される。個々の児童生徒の課題や実態を踏まえて目標に沿って指導を行い、評価し改善する、まずはこのP-D-C-Aサイクルの必要性を認識することが、特別支援学級の担当者に求められる。時間に位置づけて自立活動を指導することは、P-D-C-Aサイクルを意識しやすと考えられる。

### **(2) 指導目標を明確に捉えることができる**

時間に位置づけて自立活動を指導することは、児童生徒に何を学ばせるか、すなわち、明確な目標をもって指導することができる点でも意義がある。研究協力機関では、「時間に位置づけずに自立活動の指導を行う場合、児童の課題や指導のねらいが曖昧になりやすく、評価も難しい。時間に位置づけて指導することで、児童に何を学ばせるのか(指導目標)が明確になる」と言及していた。また、「児童の課題や変容を押さえながら計画的に指導するうえでも、自立活動を時間に位置づけて指導することは大切である」と述べていた。さらに、「気になったことをその都度、指導するだけでは、指導の成果が上がりにくい。実態を捉え直して指導目標を明確にしたうえで、特設した時間で指導を行うことによって、常に指導目標を意識して指導を行うことができた」と言及していた。これらから読み取れるように、担当者においては明確な目標設定に基づいた指導が、児童生徒の指導の成果に結びつくことが実感されている。特設した時間枠の中で計画に沿って自立活動の指導を進めることで、指導と評価の一体化を意識することが可能になる。

### **(3) 指導の段階性を意識でき、見通しをもつことができる**

自閉症のある児童の実態に基づいて指導目標を具体化していく作業を意識して実践を進めた結果、研究協力機関では、「授業では児童の実態が第一であること、また、児童が学んでいることを実感できるようにしたいと考えるようになり、(中略)、授業を通して児童の新たな課題に気付くことができるようになり、次時の授業の改善につなげていくことができるようになった」との変容が見られた。自閉症のある児童の学びとともに課題も見出すことで、次の展開に向けて改善を図っていこうとする教師の姿勢は、単発的な指導ではなく明確な指導意図のもとで自立活動を行うことの重要性を認識した。また、自閉症のある児童生徒が活動を楽しむだけでなく、授業を通して学んだことの定着や般化を見据えていた。自立活動を時間に位置づけて指導することで、担当者がより指導の段階性を意識し、それにより見通しをもった指導が可能になると考えられる。

## **2. 自閉症のある児童生徒の自立活動の授業づくりで教師が留意すべきこと**

教師が留意すべきこととして、以下の3点が挙げられる。1点目は、授業づくりは児童生徒の実態から出発することである。自閉症のある児童生徒の指導では、実態の多様性により個々のニーズに即することが重要視されている。個々の実態に適切に対応する

ためには、個々の課題を的確に把握することが必要である。実態把握では、特に困難さの部分についてその背景（理由）を捉えることが、指導を進めるうえで重要となる。児童生徒の表面上の特徴を捉えるだけでなく、その背景（理由）も含めて実態を捉えることで、彼らに対して何を、どのように指導したらよいのかが明確になり、授業づくりの方向性が見えてくる。自立活動の指導では、「何をするか」の前に、「どういった課題やニーズをもっているのか」を押さえることが肝要である。2点目は、明確な目標に基づいて指導を行うことである。指導目標を設定する際は、児童生徒の困難な部分を改善する、できそうな部分を伸ばす、得意なことをさらに伸ばすといった視点をもって、担当者が目の前の児童生徒にどういった力をつけたいのか具体的なイメージをもつことが大切である。3点目は、個々の自閉症のある児童生徒の実態に即した工夫を行うことである。教師が、一般的な自閉症の障害特性に捕らわれるのではなく、目の前の個々の児童生徒の姿（個々の児童生徒の特性や学習様式等）から、どういった働きかけや指導方法が必要なのかを考えることが大切である。

### 3. 今後の課題

特別支援学級の担当者の専門性の担保・向上には、特別支援学校のセンター的機能等の外部人材の活用のほか、特別支援学級の担当者の自助努力と校内全体での取組が必要である。担当者の自助努力としては、日々の授業記録の蓄積と活用が挙げられる。校内全体の取組としては、校内授業研究会の積極的な活用が挙げられる。校内全体で特別支援学級の授業について協議することは、特別支援学級の担当者の専門性の担保・向上という目的に留まらず、通常の学級の担任が自閉症を含む発達障害のある（可能性のある）児童生徒を理解し、彼らに支援、配慮を行ううえで必要な知識や技能を学ぶ機会にもなる。こうした取組が校内で積極的に進められることにより、特別支援学級と通常の学級の教師間の協力関係の構築に発展していくことが期待される。

#### 【成果の活用】

「自閉症・情緒障害特別支援学級及び知的障害特別支援学級に在籍する自閉症のある児童生徒の自立活動の指導に関する調査」調査報告書を刊行し、本研究所 Web サイトで公開した。調査協力校、全国特別支援学級設置学校長協会、文部科学省特別支援教育課主催の平成 27 年度特別支援教育教育課程等研究協議会（知的障害・自閉症・情緒障害教育部会）に参加した都道府県・指定都市の指導主事等に本報告書を配布した。日本特殊教育学会第 53 回大会で、アンケート調査の結果についてポスター発表を行った。本研究所の特別支援教育専門研修の講義、上述の研究協議会で本研究の成果を活用した。今後は、「自閉症のある児童生徒の自立活動の授業を組み立てるうえでの要点」のリフレットの作成、特別支援学級の担当者を対象とした研究成果報告会を予定している。